

巻頭言 「灰かぶり」

宇野 元

書棚の不思議。先日、調べ物をしていたら、ほかの書類のあいだから説教のためのメモがでてきました。いま＝たえず、の意味、と書きつけてあります。略号で添えてあった聖書の箇所から辿って、以前おこなった説教の原稿を読み返してみました。説教のテキストは、マタイによる福音書第 22 章 1 節以下の婚礼のたとえの段落です。

イエスは、また、たとえを用いて語られた。「天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている。王は家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、来ようとしなかった。」

王はあらかじめ招待していた人々を呼び集めようと二度試みて、二度とも徒労に終わったのち、三度目に家来たちに言います。見かけた者はだれでも婚宴に連れてきなさい。家来たちは、善人も悪人もみな集めてきます。ところが、そのなかに一人、礼服を着ていない人がいました。王はその人に語りかけます。「友よ、どうして礼服を着ないでここに入ってきたのか？」

イエスの豊かなたとえは、クリスチャンの連想を生みだします。あの灰かぶりの話。いつも汚れた服を着て、灰まみれで暮らしていた娘がいた。あるとき、王子のお妃を選ぶ舞踏会がひらかれた。姉たちがいそいそと出かけたが、彼女はいかなかった。自分にはふさわしい服がなかったから。すると、白い鳥がきて言います。どうしたの？ 行かないのかい？ 行けるわけがない、と答えます。すると鳥がまた言います。ほら、ここに木がある、この木をゆすってごらんよ。言われたとおりにしたら、銀のドレスがあった……。灰かぶりの私たちに、銀のドレスにまさる礼服が備えられています。御子の血による贖いによって、荒削りの十字架のもとに。しかもこの礼服は色あせない。毎日、新しく袖をとおす喜びが贈られています。これを受け取り、着ることは、ひとえに感謝のわざです。

一日をあたらしくはじめることができる。このことの恵みを噛みしめます。私たちは日々、古くなるゆえに。そしてしばしば、もうやり直せない、と頑なに思いこんでしまうゆえに。